

けやき



「大仙まるごと楽園」^{がくえん} 構想 ～ 大仙教育メソッドのさらなる広がり ～

大仙市教育委員会 教育長 吉川 正一

2017年からスタートした「大仙教育メソッド」。これは、市内の各中学校区毎に教育に関して同じベクトルで教育活動を進め、地域の学校としての存在意義を高め、ふるさとを誇りに思う児童生徒を育てることをねらいとした手法である。新型コロナウイルス感染症拡大防止策を講じている中であっても、各校とも、特に幼・小・中の連携において、次のような広がりや深まりが出てきたと感じている。

・校種間の壁をなくす

かつて、このような声が学校現場から聞こえた…「中学校に行ったら勉強嫌いになったのでは…」「小学校でもっとしっかり指導してくれれば助かるのに…」まさに壁を感じていた。私自身、小・中学校双方を経験したが、何とも言えない歯がゆさがあった。確かに教育に係る組織や教育活動などに違いはあるにしても、同じ子どもを育てている一つまり校種は違っても先生方も同じ方向を見て育てる一という原点が薄いのではないかと、そんな思いから改めて校種間連携にスポットを当てて進めてきた。

今、幼稚園・保育園・こども園の「遊びの体験」を大切に教育や小学校の個に応じたきめ細かな学習、教科の特性を生かし、生徒の興味関心を深める中学校の教科指導など、幼・小・中の先生方が互いの教育の特質を理解しながら学習指導に当たる姿が増えてきている。

最近では高校とも同じような考えをもって連携を進めている。何よりも管理職のこのことに関する理解と実践力が本メソッドの大きな支えとなっている。



<中学校教員が入ったの外国語活動>

・市役所（支所）や公民館との有機的なつながり

市役所（支所）に行くと、地域内の各小・中学校の校報などが掲示されている。各小・中学校や公民館には連携コーナーがあり、職員の笑顔の写真や通信が貼られている。

見える形で学校教育と社会教育をつなげ、公民館とともに学校も積極的に地域と関わっていく取組が進められている。ゲストティーチャーとして地域人材を活用した、言わば「生きた授業」が展開されたり、公民館の行事に参加する子どもたちの姿が多く見られるようになっていたりしている。何よりも学校と行政が顔の見える関係になってきたことが有り難い。

・地域の産業や文化財等とのつながり

そして、地域との連携。大仙市には全国に誇れる文化財や伝統行事、そして多岐にわたる産業がある。「大仙ふるさと博士」は、そのようなふるさとの素晴らしさを肌で感じ、それに関わる小さな市民になってもらいたいという思いからスタートした。ほとんどの子どもたちが初級以上のふるさと博士となっている。

「体験格差が学力を規定する」と言われる。特に幼児から中学生時期までが大切な。子どもたちが少しでも多く地域と関わり、いずれは地域を支える人材として成長してくれることを願っている。

「大仙まるごと楽園」^{がくえん} 構想

大仙教育メソッドは学校（児童生徒）を核とした取組だが、地域を学びの場として、子どもたちばかりでなく、大人（市民）もふるさとの素晴らしさを実感できる取組を進める「大仙まるごと楽園」を構築していきたいと考えている。そのためにも教育委員会ばかりでなく、市の企画部や経済産業部等と連携した取組、例えば一度は参加したいふるさと観光巡りや企業見学、地域産業出前授業・講座などを開拓し、市民、学校が活用できる仕組みを構築したいものである。



<大仙ふるさと博士育成事業企業見学day>

令和3年度から教育委員会の組織が大きく変わる。特に文化財課やスポーツ振興課は教育委員会の組織から外れることとなるが、これまで以上に強い連携のもと、この構想を進めていきたいものだ。

新型コロナウイルスの影響により、リモート出勤やオンライン授業などの取組が加速されてきているが、私はこれまでの対面によるつながりや空気感、本物に触れる感性の醸成などを基盤にしていることが大切だと思っている。そのことも踏まえつつ、市民を巻き込んだ豊かな大仙郷でのグローバルで魅力ある学びの場づくりを指向していきたいものである。

最後に、効率化や費用対効果などが求められる中であって、「豊かさ」について、作家の遠藤周作のこぼれ話で結びとしたい。

「人間生活にはムダなものがあるが、そのムダなもののために情緒が生まれ、潤いができ、人の心がなごむようになる」

例えば、「風鈴」で実際に涼しくはならない、「おはよう」と言わなくても朝は来る、教室に花がなくても授業は始まるが…豊かな環境…ちょっと振り返ってみたいものです。

学校統合

中仙地域小・中学校の統合に向けて

大仙市教育委員会 教育指導課 課長 島田 智

平成30年、中仙地域の小・中学校、保育園の保護者を対象に「中仙地域における教育に関するアンケート調査」を2回実施したところ、「統合が必要」との回答が8割を超えました。この結果を受けて、「中仙地域学校再編素案検討委員会」を立ち上げ、地域と学校、教育委員会が連携して学校統合に向けた協議を重ねました。平成31年度には地域住民を対象とした学校統合に関する説明会を開催するとともに、「中仙地域統合小学校開校準備委員会」を設立し、令和3年4月の開校に向けて準備を進めてきました。統合小学校の校名については、広く市全体に公募し、応募総数184件の中から「豊成小学校」に決定しました。また、校章、校歌の制定についても、地域の皆さんからの御意見を踏まえて決定しました。さらに、スクールバスの運行については、保護者対象の説明会で出された多くの御要望等を基に検討を重ね、運行経路や停留所を設定しました。

令和2年度はコロナ禍の中でしたが、統合前の児童生徒同士の交流促進に係る活動などをできる限り行ってきました。豊成小学校、中仙中学校の児童生徒が、目を輝かせて、地域とともに生き生きと学校生活を送ることを期待しています。

学校統合

新生「中仙中学校」に向けて

大仙市立中仙中学校 校長 戸嶋 藤典

昭和38年、長野中学校と清水中学校の統合により中仙中学校が新設された。そして59年目の春、令和3年4月には豊成中学校の編入統合により、中仙中学校も新たな歴史を刻んでいくことになる。

中仙地域統合小中学校開校準備委員会では、特に「生徒間交流」と「豊成中生の環境順応」に力を入れて準備を進めている。12月には1・2年生それぞれが交流会を行い、さらに3月には1日日程で交流を深める予定である。また、春休みにはスクールバス運行に備えた乗車体験も計画している。

これらを通して、互いの理解を深めるとともに、豊成中生が校舎環境等にいち早く順応できるように工夫しているところである。

この旧中仙町は豊かな自然と伝統文化が色濃く残る地区であり、学校教育に対して非常に協力的な地区である。だからこそ、地域の期待に応えることができるように、新生「中仙中学校」のスタートに万全を期したい。



<1年交流会>



<2年交流会>

学校統合

豊成小学校の開校に向けて

大仙市立豊川小学校 校長 大阪 瑞穂
大仙市立豊岡小学校 校長 新田 義孝

令和元年9月26日、第1回中仙地域統合小中学校開校準備委員会が開催され、豊川小学校と豊岡小学校の閉校、統合校の開校に向けた準備が始まった。

開校準備委員会には、渉外班、備品移転準備班、施設班、生徒指導班、教育課程班、児童・生徒交流班、保健・給食班、新PTA設立準備班があり、教育委員会と各校の担当者が所属し、会議を重ねた。統合校の校名は一般公募となり、6～85歳という幅広い年齢層の方々からたくさんの応募をいただいた。それぞれの校名に込められた、子どもたちへの温かい思いと健やかな成長への願いがとてもうれしく感じられた。校章は、両校のシンボルである松と鏡をイメージし、豊成中学校の田中武晴教諭にデザインしていただいた。校歌は、両校の校歌等を残し、統合校でも歌い継がれることになった。

令和3年4月に豊成小学校が誕生する。子どもたちの希望と期待に満ちた、豊成地区に元氣と笑顔を与えることができる小学校であり続けたい。



<豊成小の校章>

大仙市小中学生エール花火事業

豊成中学校閉校記念花火2020

大仙市立豊成中学校 校長 藤原 修悦

9月18日(金)。今年度で閉校する本校では「豊成中学校閉校記念花火2020」と銘打ってエール花火事業を実施した。降りしきる小雨の中ではあったが、会場の打ち上げ前の「ワクワク感」、「ドキドキ感」は最高潮に達していた。レクチャー花火から打ち上げ開始。学年花火では、「七彩」「煌和」「彩雲」のそれぞれの学年ネームをイメージした花火を、選曲したテーマ曲に合わせて打ち上げた。秋の夜空を彩る花火は本当に美しいものだった。会場の生徒・保護者の皆さんからも「キレイ!」「スゴイ!」という感嘆の声が上がっていた。

最後に閉校に寄せた校歌花火「ありがとう豊成中学校」を打ち上げた。校歌を皆で歌っていると、夜空に上がる花火の下に、その光に照らされた校舎の姿が浮かび上がった。観る人それぞれの心にこれまでの「様々な思い出」や「感謝の気持ち」が花開いた感動の瞬間であった。



<閉校記念花火>

15年間で育む「神岡健やかプラン」

大仙市立神岡小学校 校長 田口 雅人

1 「神岡健やかプラン」とは

大仙教育メソッドの達成に向けて、平和中学校区では、「神岡地域連絡協議会」という組織を活用して関係機関との連携を図っている。その中で、認定こども園・小・中連携の充実を目的に作成したのが「神岡健やかプラン」である。なお、本プランは神岡地域に全戸配布している。

「神岡健やかプラン」の内容は、大きく、認定こども園における教育・保育の「年齢別に目指す姿」と「小学校・中学校で育てたい姿（学力・心力・体力・夢）」の二つで構成されている。

2 すくすくだけっこ園との連携

・子どもたちの発達の連続性を確保するため、入学後、1年生担任とこども園担任との情報交換を行った。また、保育や授業の相互参観、協議への参加を通して、発達段階に応じた保育・教育内容等を理解することができた。

・園との相互理解を具体的な教育活動に生かす交流活動として、1年生活科

「おもちゃランド」

への園児の招待、2

年生活科「町探検」

で園訪問を行った。

相手意識をもち、より

意欲的に取り組む

姿が見られた。



<1年おもちゃランド>

3 平和中学校との連携

・平和中の被災地支援に協力し、児童会が「応援うちわ」を作成した。被災地区住民から感謝のメッセージが届けられ、被災地支援に貢献できたことを喜んだ。これは、プランにある〈心力〉に関連した活動である。

・授業研究会時、教員による相互参観、協議への参加を通して互いの校種の特徴を理解し、自校の授業改善に生かした。「中学校体験入学」では、中学校教師により、6年生の興味を引きつける体験授業が行われた。これは、プランにある〈学力〉に関連した活動である。

4 成果と課題

○他校種と目指す姿を共有することで、15年間のスパンで子どもたちの保育・教育の意図的な実践が期待できる。園児の保護者からは、「小学校入学に際しての不安の軽減につながっている」との声をいただいている。

●年度ごとに計画の見直しを図りながら、園・小・中の職員の合同研修会を定期的に行うことにより（今年度はコロナ禍で未開催）、より実効性のある連携にしていく必要がある。

児童生徒の学びの保障推進事業

大仙市教育委員会 教育指導課 課長 島田 智

県の事業である本事業の趣旨は、「新型コロナウイルス感染症防止対策と児童生徒の学習保障の両立を図り、学校全体の指導運営体制の強化・充実の一助とするため、各市町村立小・中学校等に会計年度任用職員を配置する」というものです。

派遣職員の職務内容は、①「3密」を避けるための少人数学習に係る教科指導やT T指導等の専門性の高い指導・支援業務を幅広く行う学習指導員（非常勤講師：教員免許有り）、②T T指導や学習内容の定着が不十分な児童生徒に対する個別指導、教材研究の補助等の教員免許を必要としない支援業務を幅広く行う学習指導員（非常勤職員：教員免許無し）、③校内の換気や消毒、検温などの感染症対策や健康観察のとりまとめ作業、校内の環境整備等の教員免許を必要としない支援業務を幅広く行う校務サポート・スタッフ（非常勤職員）の3種類です。

本市では、学習指導員（教員免許有り）として7校に8名、学習指導員（教員免許無し）として8校に8名、校務サポート・スタッフとして3校に3名を配置しました。学校のニーズに派遣職員がしっかりと応えてくれたおかげで、児童生徒の感染予防と学びの保障の両立につながりました。

大仙市中学生サミット（市教育委員会）

地域がつながる！ ふるさと大好きプロジェクト！

大仙市教育委員会 教育指導課 指導主事 菅原 清三

【中学生サミット全体会 令和2年8月12日（水）】

<第1部>2019年度JCI JAPAN少年少女国連大使として、スイスやスウェーデンの研修に参加した平和中学校3年久米川華穂さんから、「地域活性化とSDGsの関係性」についての基調講演が行われた。講演を基に、グループ協議を行い、一人一人の行動が、地域を活性化させるきっかけとなることへの意識を高めることができた。

<第2部>今年度は、「地域がつながる」ために、「学校がつながる」をキーワードとして、「学校同士が連携して取り組めること」について二つのことを話し合った。「スクールリンクプランⅠ（近隣校との連携、協力）」では、近隣中学校ごとに分かれて、各校の生徒会の取組の中で協力・連携できそうな取組を紹介し、その後、実際にどんなことに取り組んでいくのかを話し合った。「スクールリンクプランⅡ」では、大仙市の全中学校で行う取組「2020中学生サミット共通実践事項」について話し合い、その結果、「SNSの新しいルールづくり」に決定した。

今後は、各校独自のSNSルールを見直し、情報交換を行うことを確認した。

【その他の主な取組】

- ・REVO通信No.1～No.4の発行
- ・避難所開設訓練への参加（南外中学校にて）
- ・REVO11（各校版REVO通信）発行

「大仙ふるさと博士育成」事業 (市教育委員会)

「大仙ふるさと博士」への取組

大仙市立西仙北中学校 教頭 後藤 匡

今年度、本校では名誉博士5名、上級9名、中級46名、初級3名と、多くの生徒がそのがんばりを認定していただいた。

「地域とともに」を合い言葉に、地域に元気を届けよ

うと努め、地域とのつながりを伝統的に大切にしてきた本校である。地域行事に参加したり、総合的な学習の時間で地域の調べ学習に取り組んだり、普段からの地域とのつながりが多くのポイント獲得に関わっていると考える。

具体的な活動としては、地域のお祭りへの参加、事業所の見学、フィールドワーク、福祉施設や保育園でのボランティア活動や演奏会、家族が取り組んでいる活動への参加などが挙げられる。

取組を通じて、生徒たちは地域のことを詳しく知り、いろいろな体験ができたことで、地域に貢献できた、人の役に立てた喜びを実感できたようである。今後も、地域との連携を深め、地域の文化発信拠点としての学校でありたいと思う。



＜教育長より上級認定 (校内にて)＞

「大仙っ子新聞読もうDAY」に係る取組事例

チャレンジ！新聞タイム

大仙市立角間川小学校 校長 小原 衿子

「大仙っ子新聞読もうDAY」の新聞で、気になった記事を切り抜き要約して感想を書く時間「新聞タイム」を設けている。3～6年生が共通のシートを使い、書いたものは互いに見合うことができるように掲示している。

この取組について児童にアンケートを採ったところ、8割以上の児童が「社会で起きた出来事に関心をもつようになった」「知識がふえた気がする」「記事について書くことは楽しい」「読んだり書いたりすることが前より好きになった」と答えている。

児童からは「記事について考えをもったり関心をもったりした」(5年)「友達がどうという視点で記事をとらえているかわかっておもしろい」(6年)などの感想があった。担任からも「社会情勢への関心が深まった」「授業でも取り上げたりして活用したい」という前向きな感想を得られた。

新聞を読むだけでなく「新聞タイム」で書くことによって、情報の理解が確かになり、意見の交流ができています。



＜新聞タイムの様子＞

グローバルジュニア・マイスター育成事業 (市教育委員会)

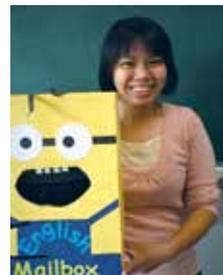
生徒の意欲を高める工夫

大仙市立大曲西中学校 ALT セリーン・チャン

グローバルジュニア・マイスター育成事業を活用することは、子どもたちが英語でコミュニケーションを楽しみ、自信をもつ上で有効です。一方、意欲を高めるため、どのようにポイントを与えるかを考慮する必要がありました。

私は2中学校校区に隔週で勤務しているため、毎週は会えない子どもたちがポイントを得るのに難しさを感じていることが分かりました。一問一答で終わらず、継続して会話を楽しんでいる場合でも一律1ポイントでは、かえってやる気を損ねてしまうと感じました。そこで、会話を続けたり何度も挑戦したりする場合は1日5ポイントまでを上限に設定し、これが子どもたちの意欲のアップにつながったと感じます。また、活動時間の確保で効果的だったのは、ちょっとした時間を使って活動を促すことです。例えば授業の前後の時間等を、私とのコミュニケーションの時間にすることで、子どもたちは安心して活動に取り組むことができました。

私は、子どもたちが意欲や自信をもち、リラックスして自分とコミュニケーションをとってもらうことにやりがいを感じています。ポイントや賞をもらうことを目的とするのではなく、子どもたちがコミュニケーションの本当のよさを感じるこそが大切だと思います。



＜いつも笑顔で＞

心のプロジェクト「夢の教室」(市教育委員会)

夢をもつすばらしさ

大仙市教育委員会 教育指導課 指導主事 石塚 史人

1 はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響によってスポーツバージョンが中止となり、音楽バージョンのみの開催となった。

2 概要

「夢の教室 佐藤卓史 トーク&コンサート」

講師：佐藤 卓史 氏 (ピアニスト)

期日：令和2年10月21日(水)、22日(木)

参加：中仙中、豊成中、仙北中、太田中

3 当日の様子

時代背景や作曲家の説明を聞いてイメージを膨らませた生徒たちは、ホールに響き渡る美しい楽曲とピアノの音色に心を奪われていた。最後には、夢の実現に向けて努力する大切さなどのお話をいただいた。後日、生徒の感想には、演奏のすばらしさはもちろん、自分の進路や夢について大きな励みになったとの声が綴られていた。



＜演奏中の佐藤卓史氏＞



＜代表生徒による質問タイム＞

地域福祉への貢献

「認知症サポーター」がいる学校

大仙市立平和中学校 教頭 本堂 智

本校では、「認知症について正しい知識をもち、認知症のよき理解者として支えていこうとする意識と態度を養う」ことをねらいとして昨年度から認知症サポーター養成講座を行っている。大仙市高齢者包括支援センターの協力を得て、昨年は全校で、今年は1年生で実施した。「DVD視聴」「認知症とその症状を理解する講話」「認知症の方への接し方の演習」など生徒にとって分かりやすい具体的な場面を想定しての講座で、多くの学びを得ることができた。

生徒からは「認知症の特徴や高齢者への具体的なサポートの仕方を学ぶことができた」「認知症は誰にでもなる可能性があり、自分が何ができるかを考える機会となった」「認知症の方や家族を温かく見守ろうとする態度や福祉の活動への関心が高まった」などの感想が聞かれた。講座受講後には「認知症サポーター」の証としてのオレンジリングを参加者全員がいただく。平和中学生全員がオレンジリングをもつ「認知症サポーター」である。毎年1年生で実施し、認知症サポーターのいる学校として「福祉教育」の充実を図り、生徒の意識や関心を一層高めていきたいと考えている。



＜認知症サポーターステッカー＞

海外派遣事業展望 (市教育委員会)

事業の振り返りと今後の展望

大仙市教育委員会 教育指導課 指導主事 牛木 豊

大仙市が誕生した平成17年度から実施されてきた海外派遣事業。これまで15回に及ぶ渡航によって、合計282名の派遣生がオーストラリア・ケアンズの壮大な自然と異文化を肌で体験しました。「大仙市の未来は私たちがつくる」という視点のもと、中学生らしくみずみずしい感性で、各自の研究テーマに沿った研修を深めてきました。毎年、派遣生の様子を見て感じたことは、研修後の視野の広がりや積極性の高まりです。何より、自分を支える周囲への、感謝の気持ちを強く感じている姿が印象的でした。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、残念ながら本事業の実施を見送ることとなりました。今後、より安全で安心できる方法で、児童生徒が英語によるコミュニケーションを楽しめる場を考えていま



＜ALTメーガン先生にインタビュー！＞

す。具体的には、令和3年度は大仙市版「イングリッシュ・キャンプ」の開催について計画を進めています。市のALTを講師として1日日程で行うことで、市内の児童生徒が英語による交流を気軽に満喫できる機会になれば、と考えています。

学力向上推進委員会 (情報活用) (市教育委員会)

未来につながるプログラミング教育

大仙市教育委員会 教育指導課 指導主事 石塚 史人

1 はじめに

今年度の学力向上推進委員会は、学習指導要領改訂に伴う小学校プログラミング教育の円滑な導入と、小・中学校の系統的な情報活用能力の育成に向け、情報活用をテーマとした。

講師には、秋田県子どもプログラミング教育研究会会長である秋田県立大学准教授 廣田千明氏を迎えた。会場を大曲小学校、高梨小学校、西仙北小学校とし、それぞれの会場で年2回の研修会を行った。

2 研修の実際

【第1回】

講義「新しい学習指導要領でのプログラミング教育」

実習「教科指導につながるスクラッチ体験」

【第2回】

実習「小学校算数正多角形の作図」

(使用教材：スクラッチ)

実習「小学校理科電気の利用」

「中学校技術家庭計測・制御のプログラミング」

(使用教材：マイクロビット、

プログラミングロボットカー)

はじめに、これからの社会で生きていく子どもたちがプログラミングを学んでいく必要性や、プログラミングのよさについて、講義をしていただいた。

次に、実習として、スクラッチやマイクロビットのプログラミングを体験した。「完成形を先に提示し、ゴールまでをイメージさせる」「少しずつ実行し、確認と修正を繰り返しながら進めていく」といった、授業を進めるときのポイントも教えていただいた。

参加者からは、「初めてで不安もあったが、やると楽しかった」「論理的に考える力を楽しみながら付けていけそうだ」「プログラムをつくる過程もそうだが、完成するともっと喜びが湧いた」「今の社会情勢の中、本当に必要な力だと思った」「中学生も興味深く学習ができそうだ」「中学校の内容は、小学校で指導する際の見通しにもなった」等、たくさんの感想が寄せられた。

3 終わりに

講師が、参加者の習熟度にも配慮しながら研修を進めてくださり、研修への充実感と今後の実践意欲を高める機会となった。

今後も、授業での効果的な活用につながるよう学校現場への浸透を図り、教職員の情報活用能力が全体的に底上げされていくよう取組を進めていきたい。



＜研修会の様子＞



＜廣田氏によるスクラッチの説明＞

課題解決セミナー (市教育委員会)

「課題解決セミナー」

大仙市教育委員会 教育指導課 参事 櫻田 武

先生方の自主的な研修に市教委指導主事がお手伝いする目的で今年度からスタートした「課題解決セミナー」。今後も課題解決のお手伝いをさせていただきます。お気軽にお声がけください。



<太田中学校の様子>

<これまでのセミナー内容>

No.	日付	曜日	会場等	内容	担当
1	4/28	火	神岡小学校	ASDの児童への適切な支援について	櫻田
2	6/30	火	研究所チャンネル	小学校外国語科における指導と評価について	牛木
3	7/ 8	水	太田中学校	校内国語授業研究会	菅原
4	8/ 4	火	中仙小学校	授業のユニバーサルデザインについて	櫻田
5	10/ 9	金	内小友小学校	スクラッチ等を使ったプログラミング実習	石塚北野
6	10/14	水	横堀小学校	国語授業構想会	菅原
7	11/24	火	横堀小学校	道徳指導案構想会	牛木
8	2/15	月	大川西根小学校	スクラッチ等を使ったプログラミング実習	石塚北野

だいせんっ子学習広場 (市教育委員会)

「だいせんっ子学習ひろば」

大仙市教育委員会 教育指導課 参事 櫻田 武

市教委では、新型コロナウイルスの感染拡大が止まらない中、休校が長期化する可能性も考えて、3月から自宅学習のサポート体制を検討していました。そして、市のコミュニティラジオ局・FMはなびの協力を得ながら番組を制作しました。内容は、市教委指導主事5人と教育専門監2人で練り、録音は休館中の大曲図書館学習室にFMはなびの収録機材を持ち込んで実施。番組は、小学校の低学年、中学年、高学年、中学校向けの計4コマを午前と午後の1日2回放送。教科は小学校が国語と算数、中学校は国語、数学、英語とし、4月22日～5月1日までの平日、計7日間毎日放送しました。

「女性の声にしてほしい」「規則正しく生活できた」「地味だけどかえって新鮮」「すぐに対応してくれてありがたい」など、リスナーからたくさんのご感想をいただきました。子どもたちの学習習慣の継続に少しでもお役に立てたことをうれしく思います。ご意見は今後の活動に生かしていきます。

FMはなびアプリ
ダウンロード

新型コロナウイルス感染症対策 (市教育委員会)

大仙っ子お家でスタディDVD

大仙市教育委員会 教育研究所長 高橋 規子

「再度休校の際の自宅学習をどう支援するか？」家庭でオンライン学習に取り組める環境が十分整備されていない中、市内小・中学校の児童生徒にとっての最善かつ現実的な方法とは？この問いからスタートして出た答えが、「一人一枚学習DVDの配付」だった。作成に当たり、教育専門監を始め市内小・中学校の多くの先生方にご協力いただいた。収録時間と内容の条件以上に大変だったのが著作権の問題で、思い描いたとおりに作成できない厳しい制約がある中で奮闘していただいた。仕上がった動画は、学年や教科によって様々な形式や工夫があり、児童生徒には何度も見直し活用してもらえたら嬉しい。

とは言え、「一人一人の児童生徒に最適な学びの保障」という点では課題が残る。特別な支援を要する児童生徒の保護者からは、学年一律のDVDでは学べないという声もいただいた。

来年度は児童生徒に一人一台のタブレット端末が配付され、万が一の際には自宅で活用できる環境も整う予定だが、学校とはこれまで以上に連携を図りながら、子どもたちの学習保障に努めていきたい。



<教育専門監による動画>

デジタル教科書の活用

デジタル教科書で生き生き学習

大仙市立四ツ屋小学校 校長 金子 徹章

本校の特別支援学級では、今年度配付された国語と算数のデジタル教科書を活用して学習を進めた。

特に自閉症・情緒障害学級では、ほぼ全単元で活用し、児童とのやりとりを電子黒板上で行って共通理解したり、国語の長文では区切りながら提示することで苦手意識を軽減したりしてきた。また、学習した画面を保存し、単元の終わりの学習の振り返りにも活用した。



<算数 角度の学習より>

自閉症・情緒障害学級の児童は、国語の学習に対して苦手意識が強く、なかなか取り組めないことがあったが、デジタル教科書を使用したことで、自分で操作しながら叙述に基づいた読み取りを主体的に行ったり、苦手だった長文を区切らなくても読み取ることができるようになったりした。また、新出漢字の学習では、デジタル教科書の書き順に合わせて、自分で正確に漢字練習をすることができるようになるなど、国語の学習に対する苦手意識が軽減され、積極的に学習に取り組めるようになった。

今後は、より効果的な活用の仕方を検討し、学習内容や児童の実態に即して積極的に活用することで、児童の学習意欲をさらに高めていきたい。

コロナ禍での避難所開設訓練

大仙市立南外中学校 教頭 藤原 秀一

1 はじめに

9月29日(火)に令和2年度「だいせん防災教育『生き抜く力育成』事業」避難所開設訓練が行われた。自助から共助へ主体的に行動する力と防災に対する高い意識を身に付けるため、平成25年度から大仙市内の中学校で持ち回りで実施されており、今年度本校は8校目の実施となる。

例年と異なりコロナ禍での実施ということで、マスクの着用や消毒等、コロナウイルスの感染防止対策を取りながら訓練が行われた。

2 訓練の概要

「南外地域を震源とする直下型の強い地震が発生し、震度6を記録。家屋の倒壊やライフラインの停止によって、本校に避難所を開設する」という想定で訓練は行われた。

午前9時30分、地震発生放送が流れると、生徒は机の下に身を隠し、シェイクアウト訓練を実施。揺れが収まるとバインダー等で頭を守りながら外へ避難した。校内の安全が確認された後、市から学校に避難所開設の要請があり、体育館に段ボール製のパーティションを設置して避難エリアを整えた。そして、総務班、連絡調整班、施設安全班、物資運搬班、給食班、救護・保健衛生班の6班に分かれて避難所開設の準備を行った。大仙市中学生サミットのメンバーも各班に所属し、準備を手伝った。また、南外小学校の5年生16名もパーティションの組立をした。午前10時45分頃、避難者の受入れが始まり、生徒は続々と避難してくる周辺住民に対応した。消毒やフェイスシールドの装着などの感染症対策を徹底しながら避難者の体調を聞き取ったり、体温を測ったりした。また、自衛隊物資の運搬訓練や避難者への食事の提供も実施することができた。

3 成果

「チーム南中」を合い言葉に、市当局や関係機関、地域の皆様のご協力の下、学校と地域の協働による訓練を見事成功させた。生徒は事前集会や本番の訓練を通して事業のねらいに近づくことができた。また、コロナ禍で学校と地域との連携・協働が制限される中、今回避難所開設訓練を実施したことで、地域に貢献することができた。



＜救護・保健衛生班の活動＞



＜避難者への食事の提供＞

継続は心なり

大仙市立内小友小学校 教諭 小西 美樹子

1 交流の概要

本校全校児童と大曲支援学校小学部の児童との交流は平成7年度から回を重ね、今年度で26年目を迎えている。開始当初は3年生と6年生のみの交流であったが、交流の成果が大きいことから、全学年での年2回の交流に移行し「ハローの会」という名称になり現在に至る。

(1) 6月「ハローの会Ⅰ」

①よろしくの会(全体)

②学年交流

(2) 11月「ハローの会Ⅱ」

①学年交流

②またねの会(全体)

※今年度は感染症対策のため、一部変更。



＜交流学習 ハローの会＞

2 長年の交流による成果

児童は卒業までに12回の交流を体験することになるが、友だちの名前や個性を知り、会えることを心待ちにしている。相手の立場になって活動内容を考え、一緒に楽しめるようになっている。さらに学年が進むと、見守り手助けするという姿勢が身に付いてきている。

本校児童の穏やかな雰囲気は、長年の交流により育まれているのではないかと感じている。

大曲中学校 生徒会執行「部」の歩み

大仙市立大曲中学校 教諭 小田嶋 徹

2019年4月、大曲中学校に発足した生徒会執行「部」。従来の生徒会執行部の活動を補完しながら、以前からの課題であった「地域連携」を軸にして平日は勿論、土日祝日も「部活動」として活動している。毎週水曜日の老人福祉施設訪問(令和2年度はコロナ禍により休止中)や一人暮らし高齢者世帯のゴミ出しボランティア、丸子川クリーンアップやエール花火の企画運営、都内の県アンテナショップで配布される大曲観光案内図制作、大曲農業高等学校野菜部とのコラボなど、様々な地域の方々と関わるチャンスをいただき、部員とともにその幸せを感じて活動している。

部員の原動力となっているのは、お年寄りをはじめとする皆様からいただく笑顔、そして「ありがとう」の言葉。彼らは「自分たちが誰かの力になれるという自信がついた」「助け合えるのが本当の強さだと思うようになった」「ボランティアを行うようになってからは、学校生活でも相手のことをよく考えて行動するようになった」と、日々の活動を振り返る。カラダとココロで感じる部活動をこれからも展開していきたい。



＜12/23 大仙雪まる隊として＞

働き方改革

ボトムアップで行う業務改善

大仙市立大曲小学校 教頭 宮野 勝

1 はじめに

本校の長時間勤務の実態は、以前から看過できない状況にあった。何よりも、「何をやっても変わらない」という職員一人一人の意識を変えていくことが業務改善の第一歩と考え、思いを生かせる体制づくりを心がけてきた。

2 取組の概要

(1) 現状の把握

職員会議にて全職員の超過勤務の状況を資料提示し、校長から超過勤務を含む業務改善の必要性について説明がなされた。それを受けて、まずは各学年部において、超過勤務の要因となっている点を遠慮なく話し合ってもらった。

(2) 業務改善プロジェクトでの検討

各学年部より1名を選出し、職員参加型のプロジェクト委員会を設置した。自由な意見を求める意図から教務主任をリーダーとし、管理職は加わらない体制をとった。作業は①要因の分類・整理、②改善案の作成と優先度の検討、③実現の可能性の考察、の順で進めた。

(3) 最終提言

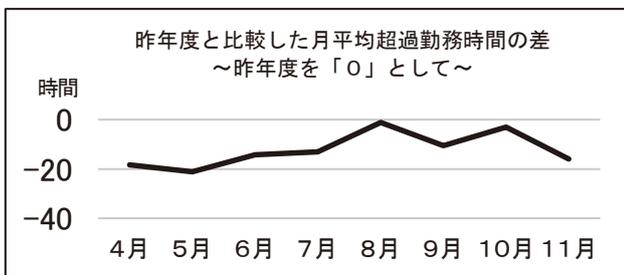
プロジェクトからの提案を、再度学年部に戻して、賛否を含めて話し合いを行った。その結果、提言された主なものは次のとおりであった。

- 各種行事等の見直し（削減、縮小）
 - ・全校集会、上下学年集会の削減
 - ・参観日への集約（学校評議員会など ほか）
- 家庭学習ノートへの対応削減
 - ・コメントは週2回（チェックは毎回）
- 日課の改善
 - ・放課後時間の確保（通常15：15放課）
 - ・週1回のノー残業デーは会議、研修なし

(4) 提言を受けて

今年度当初の職員会議にて、校長指示の下、提言に沿う形で実践していくことを確認した。

3 成果と課題



- 昨年度に比べ、職員全体の月平均超過勤務時間がほぼ10～15時間ほど減っている。
- 同様に施錠時刻も大幅に早まっている。
- 勤務時間に対する職員の意識が高まり、業務に計画性と見通しがもてている（学校評価より）。
- △限られた時間の中で効果的な教育活動を展開できる、持続可能な対策を考えていく必要がある。

新型コロナウイルス感染症対策取組事例

新しい生活様式の実践

大仙市立高梨小学校 教頭 森川 艶人

本校では、新型コロナウイルスなどの感染症対策として基本的な、マスクの着用・石けんでの手洗い・ソーシャルディスタンス・教室の換気・加湿器の使用の他、次のことに取り組んでいる。

- 健康観察カードによる体温及び体調確認（保護者記入の健康観察カードを担当が確認）
- フェイスシールドの活用（教科、活動による）
- 手指のアルコール消毒（登校後、トイレ後、給食準備前等）
- 蓋付きゴミ箱の利用（マスク、ティッシュ用）
- 発熱等の風邪症状、体調不良が生じた場合の対応と家庭への周知（内科的症状の体調不良者を第2保健室で対応し、養護教諭は装備をして対応することもあること等については、職員で共通理解及び児童・保護者へ周知）

取組の成果として、昨年度の同時期と比較し体調不良での欠席者数（450人→350人）や保健室利用者数（578人→297人）が減少した。

今後も家庭と連携しながら、継続して対策に心がけていきたい。



＜フェイスシールドを付けての授業＞

令和2年度 教育研究所のあゆみ

1 大仙市教職員研究集会

第26回大仙市教職員研究集会紙面報告 (R2. 4. 23)

2 大仙っ子学習ひろば (FMはなび)

- 小・中学生向け学習支援番組放送 (R2. 4. 22～5. 1)
- 応援メッセージ放送 (R2. 4. 29～5. 6)

3 学力向上推進委員会 (情報活用能力向上)

- 講師 秋田県立大学准教授
兼秋田県プログラミング教育研究会長
廣田 千明 氏

□第1回 (プログラミングースクラッチ)

- R2. 7. 22 大曲小学校会場
- R2. 7. 27 高梨小学校会場
- R2. 7. 30 西仙北小学校会場

□第2回 (プログラミング-マイクロボット)

- R2. 11. 12 高梨小学校会場
- R2. 11. 18 大曲小学校会場
- R2. 11. 19 西仙北小学校会場

4 大仙っ子お家でスタディDVD

小学校1年生～中学校3年生用学習支援教材の作成及び一人一枚の配付
(R2. 9月中旬に各校に納品)

5 ディスカバーだいせん

A L Tによる大仙市の食・文化・花火・自然についてのプレゼンテーションを視聴し、ふるさとのよさを再発見。
(映像は各校にライブ配信)
R3. 2. 9 大仙市仙北ふれあい文化センター

発行 大仙市教育研究所

〒014-8601 秋田県大仙市大曲上栄町2-16
TEL : 0187-63-9400 FAX : 0187-63-9401
E-mail : om-kyouken@edu.city.daisen.akita.jp